第43回 特別対談企画

古典と向き合えば、人間とは何か 経営とは何かが明瞭になる。

株式会社ハートランド総研代表取締役／古典学習陶冶会会長
佐々木 直 氏

日本経済は長らく停滞を余儀なくされています。V字回復など夢のまた夢。ならば政治に期待するしかないと思いはするものの、残念ながらこちらも体たらくを露呈したままです。日本人は一体全体どうなってしまったのか。そんな思いがこみ上げてきます。

二宮尊徳は、「道徳なき経済は犯罪であり、経済なき道徳は寝言である」と舌鋒鋭い名言を残しています。また、農業経済を専門とする東京大学大学院の鈴木宣弘教授は、「今だけ、金だけ、自分だけ」の三だけ主義が日本社会にはびこっている点を問題視していました。

そこで今回、こうした心の荒廃にビジネスリーダーはどう対応し克服すればいいかをポイントに、ハートランド総研代表取締役で古典学習陶冶会の会長も務める佐々木直さんにお話を聞きました。佐々木さんは、経営者が古典を学ぶことは人間としてぶれない土台、精神的なバックボーンを築くきっかけになると指摘しています。読者の皆様が古典に興味を持ち、自身の成長や経営の糧とされることを願い、対談の内容をご紹介します。

問われているのは人間としてのあり方

畠 今回、対談をお願いしたのは、古典を柱に据えた、「経営理念」研究・指導の第一人者である佐々木直先生です。佐々木先生は「古典学習陶冶会」を主宰されていて、私とも畠経営グループも参加し、月一回、勉強会を行っています。大変ためになる書物を送っていただいて、先生の指導の下でそれを読んだり、論語の素読塾などをやったりしております。

「報徳」に佐々木先生との対談を掲載して、読者となる経営者の皆様に古典の素晴らしさを知ってもらいたいと考え、今回の対談を企画した次第です。

佐々木 古典学習陶冶会を畠会長をはじめ皆様のご協力で15年前に立ち上げ、北陸地区会をはじめ全国の会員の皆様に古典「陶冶会では「先人の教えや言葉」と定義」の普及に努め、また、お世話にもなっているところです。本日はこういう機会を設けていただきましてありがとうございます。ご質問に対し、私なりの率直な見解を述べさせていただきたいと思っております。

畠 現在、日本が置かれている状況を考えると、心配の種は尽きません。かつてドルと円は安定した関係でしたが、円安が過度に進行しています。岸田首相は「聞く力がある」と自身の手帳を見せながら吹聴していましたが、私から見ると、聞く力よりも官僚が書いた原稿を読む力のほうがあるんでないか、そんな風に思えます。

世界各国の日本の財政状況やこの問題を解決できない政治の力について見る目が厳しくなってきています。

佐々木 そうですね。

畠 それで、これからは日本人の人間としてのあり方が問われるような気がするんです。佐々木先生は長年、古典とかあるいは論語を勉強されています。先生からご覧になって、何が日本人に欠けているか、お話してもらえればありがたいです。

佐々木 「大道廃れて仁義あり」。老子の言葉ですが、これかなという感じがずっとしています。

畠 人が行うべき正しい道、道徳が廃れてくると仁義が必要になり提唱される、という意味合いですね。逆説的に、「仁義」をあえて声高く叫ばなければいけない世の中になっているということでしょうか。

佐々木 わが国の政官財界のリーダーたちは、一部を除いて古典を学んでいないため、これに気づけていない。

畠 大道がもう失われているのに、仁義にも欠けていると。

リー・クワンユーを政治家は目指せ

佐々木 ノーベル経済学賞の候補に挙がったことのある、大阪大学名誉教授等を務めた森嶋通夫先生が生前、『なぜ日本は没落するか』(岩波書店)という本の中で、明治維新もそうだけど没落は政治から始まると強調されていますね。虚偽、不正、不祥事等がはびこり、大道が廃れてしまう。

政官財のリーダーには、リーダーである前に人間としての原点に立ち返る必要があると感じています。自然に、素直に、正直に生きていくという人としての基本である人間学が欠けているんじゃないでしょうか。

畠 もう少し国民に行動の見本を示せるような政治家がいて欲しいなと思います。

佐々木 世界的投資家のジム・ロジャーズが昨年、『世界大異変』(東洋経済新報社)という本を出しました。そこで今の日本に求められる政治家は、約50年前にシンガポールを再建したリー・クワンユー元首相だと明確に書いています。

松下電器産業(現パナソニック)の3代目社長を務めた山下俊彦氏は、『ぼくでも社長が務まった』(東洋経済新報社)という自著で、リー・クワンユーには政治家として、首相として素晴らしいものがあると記しています。リー・クワンユーは閣僚会議の席で各大臣に「清廉潔白でありなさい」と常に伝えていたそうです。50年前のシンガポールは今の日本と同じなんです。不正、不祥事等がはびこって、非常に廃れた国になってしまったんですね。それを倫理道徳の塊であるリー・クワンユーが建て直しました。たとえ自分の友人・知人でも、悪いことをしたら捕まえて刑務所に入れたそうです。

今の日本では、国会議員に2世、3世が少なくなく、政治家がいわば家業のようになっています。そうであればなおさら、幼少期からの指導、教育、中でも人間学が大事なのではないでしょうか。

儒教が説く五つの徳を養うべき

畠 私も先生と同じ考えです。今の日本の政治家にそんな倫理観を急に持てと言っても、無理だと思います。佐々木先生のおっしゃる通り、人間の真理を早い時期から勉強していかないといけない。

それは法人や事業所のリーダーである経営者も同じです。孔子に代表される昔からある古典を学び直すことが必要でしょう。儒教が説く「仁・義・礼・智・信」の五常の徳性を養ってほしい。

佐々木 孟子が言う「仁・義・礼・智」の「四端」に「信」を加えたものですね。

人間は誰でも惻隱の心(かわいそうだと思う心)、羞悪の心(悪を恥じ憎む心)、辞讓の心(譲り合いの心)、是非の心(善悪を判断する心)を持っており、これらはそれぞれに「仁・義・礼・智」の芽生えにつながります。

一、惻隱の心は仁の端なり、二、羞悪の心は義の端なり、三、辞讓の心は礼の端なり、四、是非の心は智の端なり。孟子はこれら四端を大きく育てていけば、誰でも立派な人物になれると説いています。これから上に立つ人には、ぜひこうした古典に学び精通してほしいところです。

日立製作所がリーマンショックの影響で2009年3月期に製造業で過去最大の7873億円もの赤字を記録した際、子会社の日立マクセルの会長だった川村隆氏が日立本体の社長として呼び戻され、経営再建のタクトを振るいました。3年でV字回復を果たしたわけですが、孔子の「忠恕」を参考にしながら経営再建を果たしたと川村氏は著書の中で振り返っています。川村氏のように古典を学び、経営のベースに据えているが、もっと増えてほしいと願っています。これは政治家についても同じですね。

畠 どう学び始めればいいですか。

佐々木 古典というのは、意味が分からなくてもとりあえず声に出して読む「素読」がまずは重要です。声に出すことで心の奥底にある本来自己(私はここを「悟り」の部分と呼んでいます)を刺激し、人間本来の自分がよみがえってくる。多くの先人が、そういう学びをしなければいけませんよと教えています。

損得ではなく、善悪の判断を

畠 佐々木先生は「企業倫理」という言葉もよく使われますね。

佐々木 人間と同じです。つまり会社も嘘はつかない。わが社は正直で正しい会社ですよ、だから皆さん、わが社と安心して取引しましょう。企業倫理の追求確立、そういう有効な発信にもつながります。

畠 昭和の名経営者・松下幸之助さん、平成の名経営者・稲盛和夫さんは、損得の判断ではなく善悪の判断をきちんとやっておられた。その結果、素晴らしい会社がつくられたのだと思います。

佐々木 松下幸之助はわずか8歳で大阪船場に丁稚奉公に出ました。稲盛和夫は目指していた第一志望の受験に失敗し、鹿児島大学で学んだものの、卒業後に就職した京都の碍子(がいし)メーカーが経営難に陥り、27歳で自ら創業する道を選びました。二人はどん底に近いところで苦しんだ経験があり、そこから事業の成功者としての階段を駆け上がります。

畠 最低と最高を知っているわけですね。人間としての幅が広がります。

佐々木 人の心の痛みや苦労が分かる。それが他人を思いやる「仁」につながり、経営にも反映されていきます。そのことに気づくためには、座禅を学ぶか、座禅を行うか、の二つの方法があると考えます。

例えば、アップルを創業したスティーブ・ジョブズは挫折し、どん底を味わった時期があります。彼は追放されるような形でアップルを一度退社しますが、その後、曹洞宗の禅僧のもとで、座禅で修行をしました。その結果、自己の内面世界に入り込み、シンプルな思考の重要性に気がつきました。そして復社後は、誰もが知る成功を収めました。真のリーダーというのは、自らもがき、苦しみ、あがきの中から一皮むけた人間性が醸成されてくるのではないでしょうか。

畠 先ほど触れた「仁・義・礼・智・信」を欠けば、経営も人生も成り立たないと私は思っています。辛酸をなめる経験がないのであれば、せめて頭の中にこの五文字を永遠に置いておかなければならない。

佐々木 同感です。経営理念や経営哲学を改めて策定・構築に入る機会には、「仁・義・礼・智・信」はぜひ入れておきたい言葉ですね。例えば、「わが社は、仁・義・礼・智・信を重視する」とか。

日本資本主義の父と呼ばれる渋沢栄一は「道徳経済合一」を自身の経営哲学の中心としていました。社会貢献を中心とする公益を追求する「道徳」と利益を求める経済を両立させなければならないという考え方です。義と利も実は両立できます。

畠 義が一緒になった利益の追求はOKということですよね。経済人として求める道のように思えます。

佐々木 利益だけ、売上だけ、欲望だけの事業はいけませんよ、ということです。義が根幹にある利を求める会社を目指してほしいものです。

畠 二宮尊徳は、「道徳なき経済は犯罪であり、経済なき道徳は寝言である」と言っています。一方、論語では「君子は義に悟り、小人は利に悟る」とあります。小さい人間は利益に悟るけども、君子は義に悟る。経営者も利益に悟るだけの小人ではなく、義に悟る君子を目指すべきでしょう。

「公欲」を求める企業経営を

佐々木 先日、陶冶会のある支部例会で、参加会員から「お金を儲けることはいけないのですか?」という質問がありました。実は、15～17世紀のイギリスでは、金儲けは悪であるとの教会の考え方が深く浸透していました。しかし、16世紀(1517年)にマルティン・ルターが現れ、宗教改革を実行しました。ルターはどうしたかというと、金儲けは悪いものではない、大事なのは稼いだお金をどう使うかだと説きました。

だから、ルターが宗教改革を広めた後のヨーロッパでは、道徳経済合一に近い経済社会が築かれました。つまり、儲けたお金の一部は社会のために寄付しましょう、という流れが生まれ、病院や学校などへの寄付、奨学金といった地域社会への貢献、社会的慈善事業が大半を占めるようになりました。

畠 欧米では今も寄付が当たり前ですよね。

佐々木 「同行二人」という言葉があります。同様に「利のもとは義である」という経営思想で「利と義」は歩み続ける、そういう考え方で私はいいのではないかと思います。

日本でも高度成長時代にありましたよね、利益の何%かを社会貢献に拠出する気運が。バブル崩壊以降、日本経済はずっと苦しんでいるので最近はそういう意識が薄れていますが、でも内部留保を貯め込んでいる企業は少なくありません。儲けたならば従業員と社会にお返しをしましょうという気持ちを持ってほしいものです。

畠 ただ、赤字では寄付どころか税金を収めることもできない。欲は経済を動かす大事な原動力でもあるので、否定してはいけませんよね。

佐々木 江戸時代の儒学者である佐藤一斎は、『言志四録』(講談社学術文庫)という聖賢の経書の中で、欲には公欲と私欲があり、公欲が大事だと書いています。

松下幸之助は「会社は天下の公器」と言っています。この言葉を企業に当てはめれば、「わが社では公欲を追求する。わが社が目指す利益はこれだけで、得た利益の何割は税として社会に還元し、さらに残った利益の何%は慈善事業に寄付する」といった方針を経営者が示すことは、「会社は天下の公器」を世に示す健全な会社であると評価され、道徳経済合一にかなうものです。

人間は生涯成長するために生まれてきた

畠 私は講演などで「徳」という漢字について触れることがあります。「徳」という字は、行人偏に漢数字の十四、そしてその下に心と書きます。十四の良いことをして徳を積みましょう、と。

毎日十四の良いことをするのは意外と難しく、説いている私自身もできない日が大半ですが、公欲を目指す上では大事なことかなと思います。

佐々木 中国の古典に「私たち人間は生涯成長するために生まれてきた」とあります。学びをあきらめず、人間性を追求し続けることが大切です。

畠 なるほど。肝に銘じます。今日は先生から孟子の「四端」をはじめ、いろんなお話を聞きました。経営者は自身の人格形成を含め、常に勉強を続けなければならないことを痛感しております。本日は誠にありがとうございました。

佐々木 こちらこそ、ありがとうございました。

ささきただし。1946年生まれ。日本オリベッティを経てTKCに入社。97年独立し、ハートランド総研を創立、代表に就任。2008年古典学習陶冶会設立。経営コンサルタント、社会教育家として活躍中。著書に『企業発展の礎となる経営理念の研究』(産能大学出版部)、『古典経営論21世紀の帝王学』(中央経済社)、『企業永続論』(中央経済社)、『社是・経営理念論』(中央経済社)等がある。